

流出と突破 そして エアアイグニスとエントアイグニス
——名のない神にこだまを返す——

後藤 嘉也

神はあらゆるもの、あらゆる場所に等しく存在する (Pr. 68, DW II, 145,6-7¹)。

マイスター・エックハルト

こん山には水神さんの居らすとばい。水俣病で死んだすべての魂たちよ、出て来てくれんな。

杉本 栄子

はじめに

放ち (Gelassenheit, Lassen 放下) という言葉をともに用いる中世のエックハルトと20世紀のハイデガーに目を注いで、人間やものという、名を呼びがたい神々しいものたちに理由なくこだまを返すあり方を手探りしたい。

1. ハイデガーは、存在者を対象として表象し人的物的資源として用立てる近現代の「計算する思考」に、存在(すること)の明るむ場に身を放つ「省察する熟考」を対置した。

2. ヴェルテはトマスを形而上学克服の限界に位置づけたが、ハイデガーにとって、トマスの神は第一の存在者という形而上学の神であり、エックハルトの名のない神ないし神性は存在者より高次の何かである。

3. エックハルトに従えば、真の神は根底なき根底(深淵)であり、神も人間もなぜ(根拠、理由、目的)なしに存在し働く。ハイデガーにおいても、存在は根拠・根底なき根底であり、人間もなぜなしに存在するとき、この根底である明るむ場に立つ。

4. なぜなしの生はこの世とその存在者を放つ。また、神性という根底へ自らを放って突破し(エックハルト)、エアアイグニス(存在の明るむ場)のなかへと自らを放つ(ハイデガー)。

5. 突破は流出に答えるこだまであり、エアアイグニスのなかへの放ちは存在の呼びかけに応じるエントアイグニスである。しかも、呼びかけと応答のずれは避けられない。

6. 名のない神は人間やものとなり、そして、神々しいものたちは人間やものに反照する。世界を離脱する突破、そして、エントアイグニスは世界へと反転し、神々しさをおびた人間やものの呼びかけに理由なくこだまを返す。資源ではなくありのままのものであるようにする(sein-lassen)ことをもとめる呼びかけに、ずれながら。

1. 二種の思考

ハイデガーによれば思考には二種がある。一つは計算する思考、一つは省察する熟考で

¹ Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, hg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Kohlhammer: Stuttgart からの引用箇所は、説教番号または論述名、次に DW または LW、さらに巻数、頁数、行数を付して記す。

ある (GA16, 519f.; GA13, 62²)。

1.1 計算する思考

存在するもの、存在者は、近代では認識し表象する (*vor-stellen* 前に立てる) 主体に対して立つ対象 (*Gegen-stand*) として現れ、現代では用立てる (*bestellen*) 働きによって立つ資源 (*Bestand* 徴用物資) として顕現する。世界戦争やコロナ対策や企業間の総力戦では、テクノロジーを用いて、兵器や食糧、物品、資金、人員、メディア、情報などあらゆる物資を調達し補給することが鍵を握る。これが近代と現代の計算し計画・実行する思考である。テクノロジーの本質はゲシュテル (*Ge-stell* 総かり立て体制) にある。そこでは存在者はありのままのものとしては存在しない。存在者は人的物的資源でしかなく、もの (エックハルトでは人間を含む) はものとならない。

1.2 省察する熟考——冷静に放つ

存在する一切のなかで統べる意味を沈思するのが省察する熟考である。存在することが、ひいては存在者がそれとして立ち現れうるところ、つまり会域 (*Gegnet*) ないし存在の明るむ場 (*Lichtung* 光が射し込みうる森の空地) に身を置く (*sich einlassen*) 態度であり、放ち (*Gelassenheit*) とも呼ばれる。この態度は、テクノロジーを讚美も呪いもせず、世界文明から一步退く冷静さ (*Gelassenheit*) というかたちをとる。この語はエックハルトに由来する。

計算する思考が抗いがたく支配する時代にあって、省察する熟考はどういうことであろうだろうか。

2. 第一の存在者か、語られえないものか

トマス・アクィナスとマイスター・エックハルトは、神を第一の存在者として認識するか、人間の語りえないものとみるか、という点で道が分岐する。

2.1 第一の存在者としての神

ハイデガーの教え子で同郷の宗教哲学者、B・ヴェルテは、トマス・アクィナスに形而上学克服のひそかな可能性を見出した³。しかし、ハイデガーはこれに同意せず、そのトマスをもっぱらエックハルトに帰した。

ヴェルテによれば、トマスは存在 (すること) (*esse*) と存在者 (*ens*) の差異についてさえ語るが、その存在は存在者から見られた存在、存在者がある存在者であるという事実、存在者という主語の述語、存在者性 (*Seiendheit*) でしかない。ときおりトマスが不用意に存在と存在者を混用するのはそのためである。そのトマスで、神が存在そのもの (*ipsum esse*)、純粋な存在として現れるケースがある。この純粋な存在も、神という存在者の存在、

² *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, V. Klostermann: Frankfurt a. M. からの引用箇所は GA のあとに巻数、頁数を付して記す。

³ B. Welte, *Gesammelte Schriften*, Bd. II/1, Herder: Freiburg, 2007, S. 296-306.

つまり存在者性として思考されているのか。この疑問には二つの答えが可能だとヴェルテは言う。

答え①, トマスは多くの箇所⁴で、存在そのものを、神という最高の存在者の存在として考える。神は自らの存在を担う存在者であると同時に、自らがそれを存在する当の存在そのものでもある。ここでは存在者と存在が一致する。神は「第一の存在者 (primum ens)」、
「神の実体 (substantia divina)」、
「自存する存在そのもの (ipsum esse subsistens)」⁴である。これはまさしく存在者性である。

2.2 名のない神

答え②, 「神はどんな類 (言明様式) にもない (Deus non est in aliquo genere)」⁵というテーゼもある。ヴェルテは *genera* を *Arten* と訳す。ある存在者のあり方について何かを述定する様式のことであり、アリストテレスの十のカテゴリー、存在者一般の様式である。このテーゼは、「神はどんな様式においても存在者ではない」「神は〔存在者とちがって〕「存在し」ない」という意味である。それは「存在者とその存在者性の領域を超え」、ハイデガーの意味での「形而上学の領分の境界にある」⁶。ここではもう神を表象し言明することができない。

二つの答えに齟齬があるのを、ヴェルテは百も承知である。神は実体で第一の存在者だと述べる①は神を存在者として把握することであり、神は存在者ではないという②の大胆な理解とは合わない。実際、『神学大全』では「存在」は二重の仕方で神に結びつけられた。魂が述語を主語に結合する命題構成という①の仕方では神の存在について知ることができ、存在の現実態を意味する②の仕方では「私たちは神の存在について知りえない」⁷し、語れない。

ヴェルテがみるには、①では存在そのものについての言明が形而上学の領域に引き戻されるが、その背後には、「神は *genera* のなかにはない」、
「神について、私たちはそれが何であるかを知りえない」という②の思想が隠れている。トマスは、ハイデガーのいう存在の歴史のなかで両義的な位置にある。トマス形而上学 (①) はスコラ学の哲学になった。エックハルトは形而上学克服の萌芽 (②) の方を展開して形而上学を踏み越えた。言語の近づけない事象について、思考は沈黙するしかない。その前ではあらゆる像も概念も、「ついに神という語と名さえ脱落する」⁸。

2.3 存在者よりも高次の何か

ハイデガーはこの解釈に敬意を払うが与しない。「神は実体的な (自存する) 存在そのものである」というテーゼと「神はどんな類のなかにもない」というテーゼは両立しない。

⁴ Thomas Aquinas, *Summa contra Gentiles* I, 14; *Summa Theologiae* I, q. 14. a. 4; I, q. 4. a. 2. c.

⁵ *Ibid.* I, q. 3. a. 5.

⁶ Welte, *op. cit.*, S. 301.

⁷ Thomas, *Summa Theologiae* I, q. 3. a. 4.

⁸ Welte, *op. cit.*, S. 305. 「神には名がない」 (Pr. 17, DW I, 284,4)。

実体は十の類のうちの最初の類だからである。ヴェルテが *genera* (類) を *Arten* (様式) と訳すのは無理がある。トマスの「背後に隠れた思想」と彼が呼ぶものは、トマスの思想ではなかった。

トマスとちがって、エックハルトは、「神に存在は帰属せず、神は存在者ではなく存在者よりも高次の何かである」(*Quaestio Parisiensis I, LW V, 47,14-15*) と明言したではないか。このとき彼は、存在は類ではないという指摘より以上のことを語った⁹。ヴェルテのトマスはエックハルトである。いや、エックハルトはそのトマス以上である。エックハルトは存在忘却の形而上学の限界を超えた、ということだろう。

3. なぜの問いからなぜなしへ

二人の中世哲学者に対するハイデガーの姿勢は、なぜの問いからなぜなしへの彼の移行と重なる。人間はなぜなしに生きなぜなしに存在する。

3.1 最も根源的な問い

「形而上学とは何か」(1929年)や『形而上学入門』(1935年夏学期)などで、ハイデガーは、「なぜ、そもそも存在者が存在しむしろ無があるのではないか」と問うた。存在者が存在するという事実に震撼し、その根拠に近づこうとするこの問いは、最も深遠で最も根源的である。人間は、ノーと言う者でもイエスと言う者でもなく、形而上学的本質からして「なぜを問う者」であった(GA26, 280)。

3.2 存在する根拠を問う

ところが後年、なぜの問いは根本の問いではなく過渡の問いに変わる¹⁰。「存在の真理〔エアアイグニス〕はどういうものか」という問いが真の根本の問いである。『形而上学入門』では、なぜの問いは、存在者が存在する根拠を問い、別の存在者という原因を探して

⁹ M. Heidegger, B. Welte, *Briefe und Begegnungen*, Stuttgart: Klett-Cotta, 2003, S. 28f. 晩年のこのエックハルト理解は、早くも1927年と1931年の夏学期に述べられていた。エックハルトによると、「存在」は〔被造物を語る〕有限な述語であり、神については「存在」を語れないから、神はそもそも「存在し」ない(GA33, 46f.; GA24, 128)。

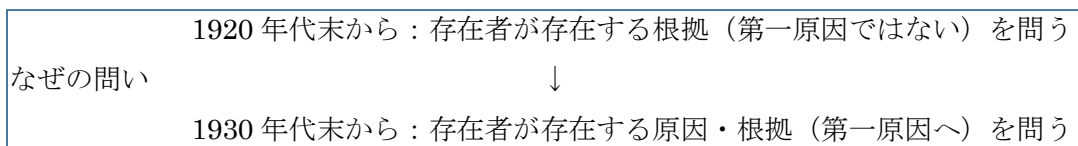
ハイデガーの死後、ヴェルテはこの疑義に再反論した(Welte, *op. cit.*, S. 84-92, 邦訳『マイスター・エックハルト——その思索へ向かって思索する試み』大津留直訳, 法政大学出版局, 2000年, 95-105頁)。トマスも、(とくにラテン語著作の)エックハルトも、実体のカテゴリーを神に適用する。後者は『出エジプト記注解』で何度か実体のカテゴリーを神に帰した。しかし、双方とも、十のカテゴリー、言明様式が、したがって実体のそれが神に適用できないと説く。トマスは「神について、私たちは、それが何であるかを知りえない」(Thomas, *op. cit.*, I, q. 3)と述べ、ドイツ語説教のエックハルトは神は無に等しいと極言した。実体という最も重要なカテゴリーの導入は二人に共通するが、エックハルトは最終的にはドイツ語著作でそれを、したがって形而上学を克服し、「無に等しい〔…〕神の純粹で未分の現在」(Welte, *op. cit.*, S. 91, 邦訳, 103頁)へと突破した。

¹⁰ Vgl. J. Greisch, >Warum denn warum?<: Heidegger und Meister Eckhart - von der Phänomenologie zum Ereignisdenken, in: *Heidegger und die christliche Tradition: Annäherung an ein schwieriges Thema*, hg. v. N. Fischer, Fr.-W. von Herrmann, F. Meiner: Hamburg, 2007, S. 129ff.

はいなかった。創造主という存在者を持ちだしても答えにはならない (GA40, 5, 8)。しかし『省察』(1938/39年)では、なぜの問いは、存在者が存在するという事実への驚きではなく、説明するなぜの問い、あらゆる存在者の第一原因を尋ねる非根源的な問いである (GA66, 272f.)。

説明するなぜの問いは、存在者が存在する原因、根拠を探究し、ものが認識に対して十分な根拠を渡すよう要求し、この要求を満たす対象だけが存在する (vgl. GA10, 55, 42)。しかし、存在の明るむ場という根底にかかわる思考こそが根源的である。

神を第一の存在者とみなすかぎりでのトマスは、神を第一原因という実体として提示するという仕方ではなぜの問いに答えた。第一原因という神には神々しさ (Göttlichkeit 神らしさ、神性) がまるでない (GA100, 37; vgl. GA11, 77) のに。



3.3 なぜなしに

トマスと対照的に、エックハルトでは(彼もスコラ学者として「第一原因」とはいうが)、神の存在と本性は「根底・根拠なき根底 (abgründlichkeit, abgrund 深淵) (Pr. 29, DW II, 84,7, Pr. 12, DW I, 194,5) であり、神はなぜなしに働く。義人もなぜなしに働きなげなしに生きる (Pr. 41, DW II, 289,21-24)。

『根拠の命題』(1955/56年)などのハイデガーでも、存在者が存在者である根拠は存在にあり、存在自身は根拠・根底なき根底 (Ab-Grund) (GA10, 166) である。存在することに理由や根拠はない。

エックハルトの刻印を受けたジレージウスによると、「バラはなぜなしにある。バラは咲くから咲く」。ハイデガーの読みでは、なぜなしにとは根拠を探さないこと、「咲くから (weil)」とは存在することという根拠に答えながらこの根拠を指示することである。人間も、「自らの仕方では——バラのようになげなしに存在するときにはじめて、自らの本質の隠された根拠・根底のなかで真に存在する」(GA10, 53-56)。人間の隠された根拠とは、存在することの明るむ場、会域である。

4. 放つ突破 そして エアアイグニス のなかへの放ち

第一の存在者である神という実体や原因をもってなぜの問いに答えず、なぜなしに生きるあり方は、放つ突破、そして、エアアイグニス のなかへの放ち (Gelassenheit) であり、この世とその存在者を放り、神性という根底へ、そして、エアアイグニスへと身を放る。

4.1 自我とすべてを放棄し、神に自らをゆだねる放ち——神性の根底への突破

エックハルトは我意を捨て (lâzen¹¹)、神に自らをゆだねる (lâzen)。エックハルトの放

¹¹ lâzen (lassen) が完了分詞 gelâzen (gelassen) に変化する用例も多い。これが名詞化した

ち (gelâzenheit, lâzen) はこの二つの要素からなる。すべてを放棄し神へと自らを放つ、という分かちがたい二重の動きである。

魂はまずすべてを放る。あらゆる被造物、自分自身ないし我意を、それどころか神をさえ投げ捨てる。「第一に自分自身を捨てなくてはならない。そうすればあらゆるものを捨てたことになる」 (Die rede der unterscheidung (RdU), DW V, 194,3-4)。「何も意志せず何も知らず何ももたない貧しい人間」 (Pr. 52, DW II, 488,5-6) になる。魂は、自分とその能力、自分を魅惑するすべてのものから、神とされる神からも離脱し、それらを放る。

同時に、この放ちは真の神へ転じ、神にすべてを、自らをゆだねる (Pr. 4, DW I, 61,1)。これを徹底したのが突破である。魂はすべてを、自分自身やものを、三位一体の神をすら突き抜けて、真の神ないし神性という根底へと突破する。根底なき根底 (3.3) とはこの根底である。ものやいわゆる神からあまりに隔絶したこの場所は、「無」、「永遠な神性の隠された闇」などとも表される。

神の根底はそのまま魂の根底である。ここでは魂は神と一になりすべてが一になる。この根底では、「神が神の固有性 (eigen) によって生きるように、私は私の固有性によって生きる」 (Pr. 5b, DW I, 90,8-9)。放つ突破によって魂と神は一になり、それぞれ固有性に到達する。

エックハルトの放ち：あらゆるものを放る＋神（性）へと自らを放り突破する
→神と人間がそれぞれの固有性によって生きる

4.2 ものに対する冷静な放ち、エアアイグニスのなかへの放ち

省察する熟考 (1.2) はまず、技術的世界のいろいろなものに対して過度に依存も敵視もせず穏やかにかかわる、「ものに対する平静な放ち」 (GA16,527) である。同時に、明るむ場に身を投じる放ちである。エックハルトに似た二要素からなる。

エアアイグニス (存在することの真理) が生起するには、思考が明るむ場にかかわり入り込む (sich einlassen auf) という lassen が必須である。このあり方は「エアアイグニスのなかへの放ち」 (GA100, 84) とも呼ばれる。放ちは、ものから離脱し計算する思考を放置するだけでなく、同時に、離脱を可能にしている場、明るむ場のなかへ入る。

あらゆるものの放ちによる根底への突破が神と人間に固有性をもたらすように、技術的対象への冷静な放ちとエアアイグニスのなかへの放ちは、存在することと人間が固有性 (Eigenes) を獲得する出来事、Er-eignis につながる¹²。

ハイデガーの放ち：ものを平静に放る＋存在の明るむ場へ自らを放る
→存在と人間がそれぞれ固有性を獲得

gelâzenheit (Gelassenheit) という語は、初期の『教導講話』における「真の離脱ないし放ち」 (DW V, 283,8) という一か所しかないようである。

¹² ハースによると、エックハルトの放ちは「先入見を放り去って (hinter sich lassen) 根源的な開かれた場 (Offenheit) のなかに立ち入る」という意味である (A. M. Haas, T. Binotto, *Meister Eckhart - der Gottsucher: aus der Ewigkeit ins Jetzt*, Kreuz: Freiburg, 2013, S. 110)。この解説はハイデガーの放ちにそっくり当てはまる。

4.3 意志の形而上学とその外部

とはいえ、ハイデガー自身はこのアナロジーに納得すまい。エックハルトの放ちに多くを学ぶ一方で、「神の意志のための我意の放擲 (Fahrenlassen)」という彼の意味では受け継がない (GA13, 42) からである。実際、ハイデガーの熟読した『教導講話』は、自分をすべて捨てて神の意志に没入するという水準にあり、自分の意志と神の意志が完全に一になるようにという祈りで閉じられていた。すべての否定が依存であるように、意志の否定は意志の形而上学の圏内にある¹³。

だが、これがエックハルトのすべてではない。心の貧しい人は何も意志しない。神とされる神をも突破するとき、人間は、自分の意志を捨てるだけでなく、神の意志をかなえようとさえ意志しない (Pr. 52, DW II, 491,9-492,2) ¹⁴。咲くから咲くバラも、生きるから生きる人間も意志から解放されている。

4.4 根底なき根底へ

さかのぼると、なぜの問いを形而上学の根本の問いとして最初に差し出した講演で、早くもハイデガーは、「無のなかへと身を放つ、すなわち偽りの神々から解放される (Sichloslassen in das Nichts, d.h. das Freiwerden von den Götzen)」 (GA9, 122, vgl. GA77, 121) ことをもとめていた。これは、エアアイグニスのなかへの放ちを先取りする一方で、エックハルトの放つ突破を引き継ぐ。この世のあらゆる神もどきから、神性の無へ、神の根底にして魂の根底である根底なき根底へ。そして、存在者を追いかけ計算する思考から、存在のヴェールである死の無へ、存在の明るむ場という根拠なき根底へ。

次に、根底なき根底への動きを見極めるために、神と魂、存在と人間のかかわりをもう少し考えたい。

5. 流出に応じる突破 そして エアアイグニスに答えるエントアイグニス

突破という語はいかにも勇ましい。法や掟を犯すのも、科学や戦争で難局を切り抜けるのも、突破、ブレイクスルーである。

この果敢な見かけに反して、エックハルトの突破は主体的意志や決断のたまものではない。非我を克服する努力を無限に続けるフィヒテの絶対的自我とちがって、突破は流出への呼応であり、エアアイグニス (固有なものが得られる出来事、存在の真理) のなかに自らを放る思考は存在の呼びかけに答えるエントアイグニス (固有なものが失われる出来事) a

¹³ ショーペンハウアーがエックハルトを頂点とするドイツ神秘主義に、「真の平静な放ち」、「この世のあらゆるものに対する冷淡さ」、「自分の意志を捨てる死と神における再生」を見つけたのは牽強付会ではない (A. Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, 1. Bd. 2. Teilbd., Diogenes: Zürich, 1977, S. 478f. 邦訳「意志と表象としての世界」西尾幹二訳、『世界の名著 続10 ショーペンハウアー』所収、中央公論社、1975年、672-3頁)。

¹⁴ 「義人は意志をおよそもたない」 (Pr. 6, DW I, 102,12-13)。J. D. Caputo, O. Pöggeler, W. Beierwaltes, E. Wolz-Gottwald, I. A. Moore なども、このエックハルトを意志の形而上学の外に置く。ハイデガーのエックハルト理解の変容を見る必要もある (2.3 でみた晩年の肯定的解釈を参照)。

である¹⁵。しかも、呼びかけと応答の全き一は不可能でずれが伴う。

5.1 流出 — 応じる突破

キリスト教の枠組みのなかで、エックハルトは、神が人間に、言葉 (wort) であるキリストという人間になったという。この出来事は「父が子を生む」という特異な表現を与えられた。それではなぜ神は人間となったか。「私が同じ神として生まれるためである」(Pr. 29, DW II, 84,2)。同じ神として生まれるとは、神と同じく子を生むことでもある¹⁶。この二にして一の出来事を、エックハルトは「神が独り子を私のなかへ生んだのと同じ動きのなかで、私は独り子を神のなかへ生み返す」と言い表した。ちょうど、高山に向かって「ヤッホー」と叫ぶと、「ヤッホー」とこだまが返るように (Pr. 22, DW I, 383,1-8)。

突破はこの生み返しである。そうだとすると、神による私という子の出産は新プラトン主義の流出であり、私が突破して子を生む父となるのは神の流出への生み返し、新プラトン主義の帰還である。突破は父からの働きかけに対するやまびこである。

神が私のなかへ独り子を生む — 私が神のなかへ独り子を生み返す
根底における神 (=私) の誕生 — 根底における神 (=神) の誕生
神が流出する — 魂が突破する

¹⁵ エアアイグニスにはエントアイグニス (Enteignis) a と b が結びつく (a, b という符号は両義性ゆえに私が勝手につけた。Vgl. D. Vallega-Neu, Die Schwarze Hefte und Heideggers seyns- geschichtlichen Abhandlungen, in: *Heidegger-Jahrbuch*, Bd. 11, 2017, S. 112)。エアアイグニスが生起するには、人間が会域に帰属し、固有なものを放棄しゆだねるエントアイグニス a が必要である。エアアイグニスが現 - 存在を根拠づけ、現 - 存在がエアアイグニスを根拠づける (=エントアイグニス a) という転回の関係 (GA65, 261)、交互の働きが成立しないことがエントアイグニス b である。エントアイグニス a が生起しないとエントアイグニス b が生じる。

エントアイグニス a : エアアイグニスが生起するように、固有なものを与える
b : エアアイグニスが生起しない

存在が人間の本質に移動し、人間の本質が存在に引き渡されるという一体の出来事は、ともに全体をかたちづくり帰属し合うようにする (Zusammengehören/lassen) (GA11, 47 強調は引用者) ことである。この lassen は、二人の放ちを意識していよう。明るむ場へと eingelassen されるから、そこへ自らを einlassen し、存在に帰属するようにされるから、そこに自らが帰属するようにする。技術的世界に帰属させられるゆえに、そこから冷静に距離をとるという意味で lassen する。やまびこに似た構造をもつこうした種々の lassen ないし gelassen の集合態 (ge-) が Gelassenheit である。

そうしてみると、ハイデガーの思考の核心をなす人間の Gelassenheit の類義語は Inständigkeit, Ek-sistenz, Da-sein, Enteignis, Gegenwart, Entsprechen など夥しい。

なお、エアアイグニス、エントアイグニスに訳語をつけなかったのは無責任のそしりを免れない。無理に日本語にするなら、エアアイグニスは「固有なものが得られる (存在の) 出来事」、「固有なものを看取する (er-äugen) 出来事」、エントアイグニスは「固有なものが (見) 失われる (存在の) 出来事」というところか。勝手な訳語をつけても戸惑わせるだけだし、エアアイグニスは「ギリシャ語のロゴスや中国語のタオと同じく思考を導く語として翻訳不可能だ」(GA11, 45) という言葉によりかかって、カタカナ語として放置した。

¹⁶ これが魂の根底における神の誕生である。魂の根底はそのまま神の根底である。魂のなかでの神の誕生は、神による私の出産であるとともに私による神の出産でもある。

5.2 エアアイグニス — 答えるエントアイグニス

エアアイグニスのなかへの放ちも似た構図を描く。ハイデガーの放ちは、存在の明るむ場ないし会域にかかわり入り込む (sich einlassen auf) ことである。この sich einlassen は自らをかかわらせるという他動詞であるだけでなく、かかわらされるという受け身の再帰動詞でもある。ある場所に入るのはそこに入れられることである¹⁷。

そのためハイデガーは、反省する熟考の本質が「放ちのなかに入れられている (eingelassen)」(GA77, 109) 点にあると注した。文法用語を借りれば状態受動である。明るむ場ないし会域に自ら入り込む放ちが可能なのは、そういうありさまへと呼びこまれ放られているからである。言い換えると、「人間と存在は互いに譲渡されあつて (übereignet) いる」(GA11, 40)。この交互の働きが、とくに存在の人間への働きかけがエアアイグニスである。übereignen という動詞は、あるものの固有なもの (Eigenes 所有物) を他のものの固有なものに移す動きを意味する

したがって、エアアイグニスのなかへの放ちはエントアイグニス a とも呼ばれる。反省する熟考の言は、「離脱する思考の本質」であり、存在ないしエアアイグニスに「答えてエントアイグネンする (固有なものを与える) 言い応じ (das antwortend enteignende Entsprechen)」(GA97, 329) である。antworten, enteignen, entsprechen は一つの行いを指す三つの語であり、ant-も ent-もまず、…に対して、というほどの意味である。antworten は、エックハルトの神が wort を生むのに対して魂が wort を生み返すように、言葉に対して言葉を返す、言い応じる (entsprechen) ことである¹⁸。enteignen はエアアイグニスに答えて固有なものを渡すことである。

放ちは存在者が存在するようにする放ち (sein-lassen) であり、これは人間の態度であるとともに「存在の最も深い意味」(GA15, 363) である。神が私のなかに子を生み、私が神のなかへ子を生み返すように、存在が人間をなかに放り (einlassen), 人間が応えて自らをなかに放る。流出に応じる突破は、エアアイグニスのなかへの放ち、エアアイグニスに答えるエントアイグニス a である。

流出する — 突破する
(wort を) 生む — (wort を) 生み返す
存在が人間を明るむ場に einlassen する — 人間が明るむ場に自らを einlassen する
存在が人間に übereignen される — 人間が存在に übereignen される
エアアイグニスが生起する — エントアイグニスが答える
「ヤッホー」と叫ぶ (Wort) — 「ヤッホー」と返す (Gegenwort)
存在が人間を放る — 人間が存在者を放り、自らを存在へ放る (4-2)

19

¹⁷ 「無のなかへと身を放つ (sich loslassen)」(4.4) もこの二重性において理解できる。

¹⁸ 答えは、質問への答えであるより「言葉 (Wort) に返す言葉 (Gegenwort)」(GA77, 23) である。神の子の出産とエアアイグニスとのアナロジーについては、J. D. Caputo, *The Mystical Element in Heidegger's Thought*, Fordham U. Pr.: New York, 1986, pp. 162-173.

¹⁹ ハイデガーは、「存在する」という動詞が「存在するようにする (sein-lassen)」という意味で他動詞的で能動的だという (注 27 を参照)。放ちによる神性への突破やエアアイグニスのな

5.3 こだます貧しさ——なぜなしに

神性と魂、存在と人間が固有なものを与え合うのは、取引きではない。

「私が自分のために何も望まなければ、神が私のために望んでくださる」(RdU, DW V, 187,6-7), また「真に貧しくあることは、それ自身豊かであることだ」(GA73.1, 880) というのは、等価交換ではないか。「本当の自分」を奪われる代償として、あの世かこの世でその返却を神か存在に託すのか。だが二つの文は、自分のために何も望まず、貧しくなるために貧しくなることを強調する修辞である。なぜなしのあり方は取引きから離脱する。

バラはなぜなしに、おのずから花びらが開く。思考を運命づけられた人間はしかし、バラとまったく同じ仕方でなぜなしに存在することはできない。それでは人間がなぜなしに存在するとはどういうことか。

「子は父を父自身のために愛する」(Daz buoch der götlichen troestunge, DW V, 42,16) とすれば、なぜなしに愛するとは流出した源のために愛することである。流出したから突破する。声が響いてきたからやまびこを返す。何かに呼びかけられたから応答する。それが人間なりの仕方でなぜなしに存在することである。

呼びかけに答えるのは、豊かで幸福な本当の自己を実現するためではない。呼びかけに応じて固有なものを引き渡すなら、自らの固有なものを失う。エックハルトは、固有のもの (eigenschaft 我執, *proprietas*) を捨てるよう繰り返し命じ、この放ちを福音書にしたがって「心の貧しさ」と呼んだ。それはハイデガーではエントアイグニス a である²⁰。エ

かへの放ちが「自発性」と特徴づけられるとしても、この自発性はたんに能動的ではなく、こだまを返して、開かれた場に自らを放る受動的で能動的な動きである。放ちは受容 (GA77, 144) でありかつ高次の能動性 (GA77, 108) である。むしろ、意志の領域に属さない以上、「能動と受動の外部」にある (GA77, 109)。放ちのこの特徴ゆえに、ムーアはガーダマーやデリダなどにならって中動態と特徴づける (I. A. Moore, *Eckhart, Heidegger, and the Imperative of Releasement*, State University of New York Pr., 2019, pp. 97-109, p. 260, n. 7)。

フォン・ヘルマンは、エックハルトの *Lassen* を拠り所にハイデガーが独自に展開した、5つの *lassen* からなる *Gelassenheit* の全構造を次のように一括した (Fr.-W. v. Hermann, *Gelassenheit im Denken Martin Heideggers*, in: *Mut - Gelassenheit - Weisheit: Impulse aus Philosophie und Theologie*, hg. v. P. Reifenberg, R. Rothenbusch, K. Alber: Freiburg, 2018, S. 127)。

「会域から生起して、表象する思考から離れる (Ablassen) のをゆるす (Zulassen) ——会域が現れることのなかへ思考が自らを入れる (Sicheinlassen) ように、会域から生起しつつ入れられて (Eingelassenwerden) ——会域がこのように現れることのなかへ思考が委ねられつつける (Überlassenbleiben) なかで」。

ハイデガーにてらした委細の説明は省くが、図式化すると、存在が人間を放つ (*lassen*) 動きと、これに答えて、人間が存在者を放棄 (*lassen*) し、しかも会域に自らを放り込む (*einlassen*)、という動きからなる。ただしフォン・ヘルマンには、存在と人間が存在者をありのままにあるようにする働き (sein-lassen) (6.2 以下) が視野に入っていない。この放ちが見えているのは、R. Schürmann, *Wandering Joy: Meister Eckhart's Mystical Philosophy*, Bell Pond Books: Great Barrington, 2001, p. 199 などである。

²⁰ Beierwaltes のおそらく正しい推定によると、「必要でないものはすべてなくてすませられるのが真に (心・精神の) 貧しい人間だ」(RdU, DW V, 300,1-2; GA73.1, 878) という言葉をハイデガーはエックハルトから受容した (W. Beierwaltes, *Heideggers Gelassenheit in: Amicus Plato magis amica veritas: Festschrift für Wolfgang Wieland zum 65. Geburtstag*, hg. v. R. Enskat, Gruyter: Berlin, 1998, S. 18, Anm. 59)。

ントアイグニスのエント(ent-)という前綴りは対応だけでなく分離や剥奪をも意味する。

固有なものの喪失が固有なものの生起である。なぜなしに呼びかけに応じる贈与によって、父または存在は固有なものを獲得する。自分も、与えることによって貧しい自分という固有性を得る²¹。

5.4 ひび割れずれた一つの出来事

そうだとすると、神が子を生む—私が子を生み返すという出来事も、存在と人間の相互帰属も、二つの極からなる一体性である（二極はこの出来事以前にそれぞれ即自的に存在するわけではないが）。この一体性は永遠の一ではなく、ひび割れずれて出来する。

エックハルトにとって、神の天地創造は「永遠性の第一の単一の今」のなかで行われており、行われたし、行われるであろう（*Expositio libri Genesis*, LW I, 190,1-4）。神と合一している人間には「苦しみも〔時間の〕経過もなく一つの同じ永遠がある」（Pr. 2, DW I, 34,6-7）。

しかし、神と魂、存在と思考のあいだに、裂け目と遅れは避けられない。呼びかける「ヤッホー」と答える「ヤッホー」は一つの現在を構成しない。「結合を拒み一つの全体に仕立てられない〔…〕隔てられた時（diachronie）」²²、それが時間である。すべてが一になる神の現在は非現在に侵蝕される。それゆえハイデガーは、過去と未来を止揚して存在者全体の存在をとどまる今（*nunc stans*）において経験するキリスト教とその神秘主義から、またインドの瞑想から遠ざかり、存在者の現前性を既在・現在・将来という三様態において経験した（GA89, 664）²³。

エックハルトの一も一であり続けられない。亀裂の入った出来事を、単一の今と表現しただけである。もともと1924年、存在の問いを立てる若いハイデガーは、エックハルトの新刊の三部作に魅了された。三部作への全般的序文の第一のテーゼ「存在は神である（*Esse est deus*）」は、実体概念を神に適用することを解消して、「存在の時間的動詞的意味」を指示したからである²⁴。唯一の永遠の今はとどまる時間ではなく、「力動的で動く

²¹ 交換を骨格とする関係——すべての関係は交換である——を否定できるか、簡単には決められない。他を援助することは自らが援助されることである。これは援助される他の荷を軽くする。ソーシャルワーカーだろうが親だろうが、「私たちは貧しくなった、豊かになるために」（GA73.1, 880）という機序のなかにいる。

²² E. Levinas, *Autrement qu' être ou au-delà de l'essence*, Kluwer Academic Publishers: Dordrecht, 1988, p. 14. (邦訳, レヴィナス『存在の彼方へ』合田正人訳, 講談社学術文庫, 1999年, 42頁。)

²³ 固有性も固有なものを得る生起であり、固有性が生起しないエントアイグニスbがつきまとう。本質も本質となるという動態（*Wesung*）であり、非本質がまとわりつく。存在と人間の至福の一や永遠の今はない。隠れなさや隠れは等しく根源的である。

²⁴ H.-G. Gadamer, *Gesammelte Werke*, Bd. 3, J.C.B. Mohr: Tübingen, 1987, S. 406. *Esse est deus* というテーゼを説明する、創世記冒頭の文「はじめに神は天と地を創造した」の注解によれば, *creavit* (創造した) は完了過去時制の動詞である。「神は存在であるから, 神は, 神のみが創造する, あるいは創造した」(*Prologus generalis in opus tripartitum*, LW II, 160,10)。存在するとは「はじめに創造した」ということであり, ここには動的時間的意味がひそむ。そのテーゼの *est* が他動詞だというハイデガーの解釈については注27を参照。

シューアマンに洩らしたところでは, ハイデガーが存在を動詞的に現前 (*An-wesen*) とし

時間、新しい存在がたえず流れ込む時間」である²⁵。とどまる今はひび割れている。

たしかに、エックハルトの「あの一者〔神〕のなかではすべての多様性は一である」(RdU, DW V, 202,9-10)。だが、天変地異も戦争も生み出され存在するこの世界の内をしばし存在している人間が無の根底へと突破して神性との一にとどまり永遠の今を寿ぐのは、生み出された他の存在者の存在の忘却である²⁶。流出なしに突破がありえないように、すべての多様性なしに一はありえない。多が一の多であるように、一はつねにすでに多である。

6. 名のない神にこだまを返す

世界を放ることによって、突破、そして、エントアイグニス、無名の神性または神々しいものたちに向かって自らを放ち、しかも世界へと反転する。エックハルトではすべてのものは神である。ハイデガーにとって、死すべき人々と神々しいものたちが天地のあいだで鏡に映し合うとき、ものがものとなり、人間もものも神々しさを照り返す。突破、そして、エントアイグニスは、ありのままのものであるようにする (sein-lassen) のを要求する人間やものの呼びかけに、理由なく、ずれながらこだまする。

6.1 ものか神性か、世界か神か

ものから離脱し、存在者を支配する意志を放ることによって、一人は神性へと突破し、一人はエアアイグニスのなかへ自らを放る。

神が死んだのは、「私が全世界とすべての創造されたものに死ぬためである」(Pr. 29, DW II, 84,2-3)。世界とともに死ぬとは離脱し放つことである。そして、死へとかわることによって、「世界は崩れ落ちて無になり、[...] いま私がすがり配慮的に気遣うすべてのものが無意味になる」。現存在は各瞬間において、自らと世界のどちらを選ぶかを迫られる (GA80.1, 144)。のちには、神は私たちの前から逃亡しているのか、私たちはそれを真に経験するのか、ということが「唯一の問い」(GA66, 415) である。この経験は世界という空虚な無を捨て自らをとることであろう。

ものか神性か、世界か神か、あれかこれかなのか。

6.2 世界へと反転し、存在者が存在者であるようにする

しかし、放ちは世界を忌避するグノーシス主義ではない。

て考えるようになったのはエックハルトの説教と関連がある (Schürmann, *op. cit.*, p. 254, n. 93)。時間のこのずれゆえに、ハイデガーの放ちの本質は「待つ」(GA77, 123) ことにあり、一からほど遠い。さかのぼると、1916年の「歴史科学における時間概念」ですでに、「時間は変化し多様になるものであり、永遠は自らを単一に保つ」というエックハルトの言葉を題辞に引用していた。自然科学の計算する思考の時間 (Zeit) が等質で量的に規定できるのに対して、歴史科学の時間 (Zeiten) は質的で、おのおのの時間・時代は内容の構造上別の時間である (GA1, 415, 424, 432f.)。両者の時間概念はまったく別種で、歴史の時間は変化し複数である。

²⁵ Haas, Binotto, *Meister Eckhart - der Gottsucher*, S. 85.

²⁶ 「海の彼方の一度も会ったことない人にも、自分の傍らの親しい友へと同じくよいものを与えねばならない」(Pr. 5b, DW I, 87,11-88,2)。全き一は、遠くで飢え渴く他者の存在を忘れてはじめて生起する。

エックハルトのものは神が出産した。「すべてのものは神のなかで等しく、しかも神自身である」(Pr. 12, DW I, 199,6)。ハイデガーにとって、存在することは、存在者が存在することの根拠であり、存在者が——対象や資源としてであれ——存在者であるようにしている。ものに対する冷静な放ちは技術的对象に対するイエスでありノーである。技術的世界を逃れて竹林に隠棲はしない。

それゆえ、世界の放ちと神性への突破(エックハルト)は神から流出した世界へと反転し²⁷、人間はなぜなしの行為を命じられる。

ものの放ちと明るむ場への放ち(ハイデガー)も世界に向き直り、「世界が世界となるように[明るむ場の]なかに立って放る」(GA77, 151)。存在のエアアイグニス(Enteignis)は存在者の到着であり、存在の最も深い意味は Lassen, つまり、存在者が存在するようにする(sein-lassen)とある²⁸。存在は存在者をそれが当の存在者として存在するよう放つ。そこでハイデガーはたとえば壺という存在者、ものを取り上げて四方界を語った。

エントアイグニス a は「四方界という一つの事象へのエントアイグニス(Enteignis zur Einfalt des Gevierts)」(GA100, 279)である。ハイデガーはときおり Sein や Seyn に十字を付す。この十字は、四方界、つまり天空と大地、死すべき人々と神々しいものたちという四者の統体を示す²⁹。存在が隠された計算する思考においては、世界は四方界の戯れとして世界とならず、ものはものとならない。宇宙も陸海もただの資源として存在し、神々しいものたちは早くから姿を消した。人的資源としての人間も、自他の死を見つめられないかぎり、死すべき人々というよりいつか死亡する生きものでしかない。「もの-四方界を固有性のなかへ生起させる(Ereignen des Ding-Gevieris in das Eigentum)」(GA73.2, 1447)という出来事を思考するのはそのためである。

天空からの陽光を浴びて大地に育った葡萄の実は、ワインとなって壺というものに入れられ注ぎ出される。死すべき人間たちはこれを飲み、神々しいものたち(神や仏などという名を与えられる)に供える。これら四者を「一つのものとして取り集めること、それが壺の本質が本質となることである」(GA7, 175)。

こうしてものがものとなり、四方界の戯れとして世界が世界となる。エアアイグニスが生起する。そのためには、四方界という一つの事象へのエントアイグニス、ないし、エアアイグニスのなかへの放ちが必須である。計算する思考が歴史的運命として送られている時代に、こうした世界がおとぎ話に感じられようと。

²⁷ エックハルト自身は流出より突破が高貴だと考えた(Pr. 52, DW II, 504, 4)。流出は多だが、突破ではすべてが一だからであろう。

²⁸ 花咲く木が前に立っているのに、「私たちはこれまで一度もその木がそこに立つようにした(stehen-lassen)ことがない」(GA8, 46)。そうだとすると、存在することの思考は、「存在者がありのままに存在するようにする(Das Sein-lassen des Seienden, wie und was es ist)」(GA66, 103)放ちの思考である。「ありのまま」は「神の子として」に相当する。

「存在は神である(Esse est deus)」というテーゼ(5-4)は、das Sein »istet« Gott, つまり「存在は神が神であるようにする(das Sein läßt Gott Gott sein)」と解釈され、この ist は「他動詞的で能動的」である。神が「神である」ことを可能にするのは存在である(GA15, 325)。

²⁹ 十字はまた、存在することは私たちが表象する対象ではないという抹消記号でもある。

6.3 名のない神, そして, 神々しいものたち

流出した神ないし神性, そして, 神々しいものたちとはどういうものか。大衆向けプラトン主義であるかぎりでのキリスト教や二世界説の神もどきでないとするれば, 何のことだろう。エックハルトの神は名前をもたず, 人間には知りえない (2.2)。ハイデガーの神々しいものたちは名を呼びがたい³⁰。いま私もしているように, *deus* や *Gott*, 神や仏という名で呼び, 何かを語るのは, 自分がこしらえた神に仕立てる偶像崇拜である。

神という仮の名を与えられているのは, 個々の他なるものである。「他者とは神ないし誰でもよい人, [...] 任意の特異性である」³¹。どの人間もものも, 泣き出した赤ん坊も散る桜も, 知られず語られえない他者にして神である。すべてのものは, 不安のなかで滑り落ち離脱され放られるべき無であると同時に, 名のない神である。

これは, あらゆるものがいまその存在するとおりの姿で神であるという単純な汎神論ではない³²。ゆえなくして——各種科学は原因を説明するが——罵声を浴びせられる幼児はそのままで神であることはない。それは神の生んだ子でありながら, ありのままのその幼児, 神の生んだ子ではない。親も, 生み返す神として浴びせたのではない。ひとの命を奪った濁流は, 人間中心主義者であらざるをえない人間にとって神々しくない。被造物はそれ自身では創造主ではなくただの無である。ハイデガーの神(々)は逃走している。

6.4 名のない神に言い応じる

人間もものもそのままでは神々しくない。それゆえ, 世界へと反転した放ちは, 子なる神を生み返し, 名のない神である存在者がありのままに存在するようにする。

「人間ともものに注ぐどんな光のなかでも超越からの光が照り返している」³³。この超越は, 天上かどこかに存在する永遠の存在者ではなく, 神性とも呼ぶべき純粋な無である。

「天空と大地, 死すべき人々と神々しいものたちという四方界が鏡に映し合う戯れとして, 世界が世界となる」(GA79, 74) とすれば, 死すべき人間が神々しいものたちの光をかすかに反射し, 神々しさをおびる。山には水神さんがいて, 死んだ魂たちが現れて水神さんを感じとるとき, その神々しさが魂たちに映じ, 魂たちのありさまは水神さんにうつる。

神性への突破と存在へのエントアイグニス(火)を転じて, ものを生み返しありのままのもの

³⁰「いまなお私たちは神々しいものをあえて語ろうとできるだろうか, 言葉で名を呼びかけて」(Heidegger, *Welte, Briefe und Begegnungen*, S. 46)。

³¹ J. Derrida, *Sauf le nom*, Galilée:Paris, 1993, p. 92. (邦訳, デリダ『名を救う——否定神学をめぐる複数の声』小林康夫, 西山雄二訳, 未来社, 2005年, 86頁。)

³² 四方界をレヴィナスは「恥ずべき唯物論(マテリアリズム)」と呼んだ。「天地のあいだで, 神々を待ちながら, 人間たちとともに住むなかで, 存在することが明らかになる」とときには, ものおよび非人格的で中立的な存在が与えられているだけで, 苦しむ他者という存在者が見捨てられるからである (E. Levinas, *Totalité et infini*, M. Nijhoff: La Haye 1984, p. 275. 邦訳『全体性と無限(下)』熊野純彦訳, 岩波文庫, 2006年, 254頁)。人間だけでなくすべてのもの, 物質が神だという流出説も, 一神論者のレヴィナスには汎神論に見えよう。だが, 苦しむ他者も神であり, ありのままのものであるようにされるべき存在者である。

³³ Th. W. Adorno, *Negative Dialektik*, Suhrkamp: Frankfurt a. M. 1973, S. 396. (邦訳, アドルノ『否定弁証法』木田, 徳永他訳, 作品社, 1996年, 497頁。)

にするのは容易なわざではない。ゲシュテルの時代には、過労死寸前の人と近くにいる人とのずれ、時の隔たりが広がる。それでもものたちは語りかけている。

エックハルト	神が流出する — 人間があらゆるものを放る + 神 (性) へと自らを放り突破
	↓
	神はあらゆるものに等しく存在 — 人間が海の彼方の見知らぬ人にもよいものを与える

ハイデガー	存在が人間を <i>einlassen</i> — 人間が存在者を平静に放る + ^{エアアイグニスへのエントアイグニス} 存在の明るむ場へ自らを放る
	↓
	存在が存在者を <i>sein-lassen</i> — 人間が存在者を <i>sein-lassen</i>
	→ 四方界 (× <i>Seyn</i>) の戯れとして世界が世界になる

おわりに

第一原因という哲学者の神も現世や来世で報いてくれる神も捨てられるべき偶像である。名のない神はあらゆるもの、あらゆる場所に同じように存在する。あらゆるものは、死者の魂も橋も、神々しいものたちを鏡のように映し出し神性をおびる。

流出した神の子の生み返し、エアアイグニスへのエントアイグニスは、用立てられる人的物的資源でしかありえないものがありのままのものであるようにすることである。それらのものたちは、命をはぐくみ死に至らせる天地のあいだで、人間に沈黙の言語で話しかけている。